

## これですべてである～ウイリアムズ主教の年間報告より～

2019年12月15日（水）教区関係教役者逝去記念聖餐式説教より

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

毎月教区レクイエムで記念するすべての方々と同じように、今日の聖餐式で覚える信仰の先輩たちに共通している点は、皆、神様に召された弟子であるということです。この方々は、マタイによる福音書 28 章のイエスの至上命令を身をもって実践された方々で、それだけでも記憶されるに十分であると思います。ただ、殆どの場合に記録が残っておらず、いつどこで信仰の道に入ったのか、どのような信仰の履歴を持ち、牧会者としてどういうビジョンやゴールを抱いたかなどなど、詳しくは知られていません。中でも海外からの宣教師の場合、どのように異国への宣教に召され、実際に日本に着いてから言葉と文化、暮らしの壁を乗り越えながら宣教・牧会に励む中でどのような難関とやりがいがあったのか、知りたいところです。大阪教区に来て一年足らずの私にとってはそれを知るすべがなく、なるべくわずかに伝わる記録に頼っています。その資料の一つに「宣教事始め」という貴重な資料集があります。「日本聖公会宣教開始期の大阪発信宣教報告書簡集」という副題で分かるように、1871年から1876年まで約5年間の、派遣の母体であるアメリカ聖公会の本部への報告書で、「宣教の精神・The Spirit of Mission」という雑誌の掲載文から、主に大阪・京都関係のものを抜粋したものです。

12月の逝去者記念聖餐式で、わたしたちは誰よりも先に日本聖公会の設立の貢献者であるC.M.ウイリアムズ主教を覚えます。すでに知られているように、ウイリアムズ師は「道を伝えて己を伝えず」という言葉で刻印されています。これはコリントの信徒への手紙「わたしたちは、自分自身を宣べ伝えるのではなく、主であるイエス・キリストを宣べ伝えています」という使徒パウロの言葉です。師の偉大なところは、この聖書の精神を貫いたことにあり、それが本人の記録が乏しい理由でもあります。師が大阪へ着いたのは1869年12月なので、2019年はちょうど150年になります。そして師が翌年に自宅に設けたチャペルオオサカから聖テモテ教会を経て、川口基督教会へとたどってきた教会の歴史は、2020年に150周年を迎えます。その150年前の様子を伝える文章として、大阪到着後、同師がアメリカへ出した1871年6月の年度報告を引用します。「日本に教役者と医師を送れとの訴えをしばしば提出してきたのだが、昨年5月末にA.R.モリス師が到着して、今大阪に到着し、将来の為に語学の勉強に専心準備している旨の報告ができることになって、大いに満足である。現在の所、有望な報告といえば、これですべてである。キリスト教に日本に足場作りをさせないために、迫害をすれば弱まってしまうというなら、迫害を強化しようと政

府は決定した。これはお知らせしたくない悲しい事実である。」

宣教開始期の悩みや明るくない状況がうかがえる文書ですが、この報告の内容から今の大阪教区の状況を考えてみます。まず、今私たちはゼロではありません。主教のように迫害を恐れる状況でもありません。むしろ今私たちは、今までやってきたことや持っているものの故に心配して悩んでいるわけで、外部からの圧力や迫害もありません。そういう意味では、宣教と伝道の障害物は、私たちの内に多くあるのではないかと言えます。現在の日本社会に対する私たちの理解が不十分で、それに合わせての宣教への努力が足りないのではないかと、自分にも問いかけてみます。待ち続けた結果、やっと一人の仲間を迎え「これですべてである」と書簡をしたためた150年前の師の心境から、大いに学びたいと思います。